



TITLE:

金代の物力錢に就て(下)

AUTHOR(S):

小川, 裕人

CITATION:

小川, 裕人. 金代の物力錢に就て(下). 東洋史研究 1941, 6(3): 193-217

ISSUE DATE:

1941-05-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/147099>

RIGHT:

金代の物力錢に就て（下）

小 川 裕 人

四、制度採用の意義

前述の如く金國內に於て軍事的奉仕を使命とする猛安謀克戸の物力推排は、主として經濟的奉仕を使命とする漢人戸に於けるものとは別個に企てられ、世宗大定二十年頃に至つて始めてこれが實現の機運に立ち至つた。然らば漢人戸に關する物力通檢は金國に於ては何時頃より行はれて居たであらうか。既掲の如く金史卷四六、食貨一、通檢推排大定四年の物力通檢に關する世宗の詔には

粵自國初有司常行大比、于今四十年矣、正隆時兵役並興、調發無度、富者今貧不能自存、版籍所無者、今爲富室而猶幸免、

とあつて、この時の物力通檢法整備の理由を述べて居

るが、金にはこれより四十年以前の國初に、既に民戸富力の等第が行はれ、差役の標準とされて居たことを推せしむるものがある。大定四年より四十年以前と言へば太宗の天會初頃に當る。當時果して斯くの如き漢風制度が行はれて居たであらうか。金國を立てた生女眞も一般北族の例に洩れず、初はその被征服種族に對する經濟的欲望も略奪俘掠等暴力的手段によつて果さんとしたこと少くなかつた。彼等の對遼獨立戰爭の當初の記事に「以俘獲賜將士」とか、「以所獲頒宗室耆老」とか「殺獲首虜及車馬甲兵珍玩不可勝計、徧賜官屬將士」とか「取其餘民以歸」等あるによつても窺はれよう。

阿骨打はその獨立に成功するや、その國家的自覺は對外的に強化され、遼室と同様に即位して帝號を稱し

建元し、且つ遼室に對し對等國としての承認を求めた。

支那風な自大意識に酔ひ多年の太平に偷安して居た遼國爲政者は廢頽せる自國の實力にも認識を缺き、盛り上り來る生女眞の發展力にも理解なく、阿骨打の要求は遂に容れられなかつた。こゝに於て生女眞の獨立戰爭は一轉して金室の倒遼運動と化した。金室が遼室の繼承者たらんとする意識は次第に明確となり、その目指すところは唯遼室の主權とこれを背景とする權力機構の倒壞に在つて、遼室の不道や外交的不信を訴へて民衆と遼室との背離を策し、土着漢人制をも採用して極力民衆の安撫に力めるに至つた。女真人舊來の略奪俘掠の傾向はこれを抑制せんとし、遼室や貴族の所有せし貨寶はこれを獲得するが、一般臣下や民衆の財産はこれを保護しその業を失はしめざらんとした。來降新附者の乏食の者には官糧をも給し振恤を行つた。縦に良民を俘掠して奴婢とすることを禁止し、既に被虜せられ、或は鬻身して奴婢となれる者にはその所有者の既得權は認めるが、奴婢自らにはその經濟的給付により贖償して良民となることはこれを許した。又遼人の奴婢と雖も主人に先じて投降した者には良民として

の權利を得しめた。斯くの如き漢風愛民的な宣撫工作は、金室の滅遼戰爭が有利に展開し、その遼室の繼承者としての地位が固まるに従つて益々強化された。燕京を攻略して遼の政治的軍事的據點が盡く金人の手に歸し、漢族も大量的にその制壓下に入り來るや、金室も既に「得天下」「天下一家」等の意識を得るに至つて居る。然しこれは遼の繼承者としての自覺で、こゝに天下といふも具體的な北朝的國家の謂であらう。さればその漢風制度も當時は遼の舊制をそのまゝ踏襲し、その民衆の宣撫にも主としてその地方に於ける來降者の威望才能ある者を以て當らしめた。斯くの如く遼國遺民をその舊來の制度と方法により、これに習熟し人望ある來降者を以て治めしめざるを得なかつたところに、遼の舊制なる漢人樞密院制採用の理由が存する。

政治は歴史的である限り、必然性を擔ひ必ず先行狀態の刻印を自らの上に印するものである。これが政治の歴史性であり、そこに政治の民族的個有性がある。征服者が被征服民族に對し全く新なる政治を開始する場合に於てもその被征服民族の過去の情勢と文化が征

服者の政治に對して力強き修正を及ぼし來るものである。言葉が民族の產物であるやうに制度や政治も民族固有のものでなければならぬ。殊にこゝに問題とする金初の場合に於ては、漢族社會文化の高次性と、金室が遼室の繼承者たらんとする北朝的な國家的自覺が一層右の如き傾向を顯著ならしめて居る。

斯く金國の漢風制度の採用にはその支配下に歸した漢族の安撫といふ延引ならぬ必要の存したことは疑ひないが、これ亦金室爲政者の漢風文化の攝取と見ることが必ずしも支障なからう。斯くの如く比較的速かに女真人が漢風文化を攝取したのは生女眞が初よりこの種の文化の受容の準備や地盤が出来て居て内的に漢風文化の攝取に應ずる面のあつたことも注意せねばならぬ。生女眞人も比較的早くより高度文化に對する憧憬の念が強かつたやうである。

君長完顏氏がその祖宗傳説に於て、始祖を獨自の發源に求めず、文化國高麗よりの移住者として居る點、又完顏氏の最高二巨酋が、その生女眞の君長としての稱號に遼帝より賜與された漢風の太師と國相を慣用して居た點、阿骨打の襲位するに及んで始めて都勃極烈

を號しその獨立意識を明確にしたが、僅かに數年を出でずして、漢風國家遼に倣つて帝號を稱し、建元し國書も漢文を以て作成したのみならず、契丹文字と同様に漢字風の女眞文字を制定したこと等にも女真人が漢風文化の攝取に對し内的に應ずる面の多かつたことが窺はれよう。

生女眞は勃興以前より遼に羈縻せられて、その文化に接する機會が多かつたのみならず、高麗とも交渉してその文化を受容する可能性にも恵まれて居た。低度文化民は社會的にも文化的にも封鎖性の多いことは言ふまでもないが、その中でも女真人の如く土着農耕性の多い種族は天幕生活を營む遊牧種族に比してその封鎖性は少いやうである。先進異種族を奴婢として家内に容れ、その經濟的文化的奉仕を利用することの多かつたのも封鎖性少き理由に基くであらう。斯くて女真人は漢風文化受容の素地や準備は比較的早くより出来て居たと見られるのである。且つ契丹國が塞外國家として勃興しつゝ、多數の漢族を包含し、漢文化を攝取して、塞外的國家より北朝的國家への推移を示した前例の存するといふ歴史的理由もあつて、金室爲政者の

漢風文化の攝取には非常に速かなるものがあつた。制度や政治に於てのみならず、學術その他の文化に於ても遼の遺風を踏襲しようとする努力があつた。中京攻伐の時の詔（金史卷二、太祖紀）に

若克中京、所得禮樂儀仗圖書文籍、並先次津發赴闕、とある。これによつても當時の漢風文化攝取の態度が窺はれよう。

金室政治の漢風化愛民化の傾向は太宗時代に入つて益々進展した。積極的な振給や撫恤を行つたことは勿論、奴婢の解放に於ても暴力的強制に因れる者のみならず、貧窮にしてその子を賣つた者に就ても有利な贖償の方法が定められた。更に食貨志（卷四七）租賦天會元年のところに

勅有司輕徭賦、勸稼穡

とあつて、徭役賦役を輕減し、積極的な勸農をさへ行つて居る。又太宗紀天會元年十二月のところに

辛巳、蠲民間貸息、詔、以咸州以南蘇復州以北年穀不登、其應輸南京軍糧、免之、

とあり、同二年春正月のところに

癸亥以東京比歲不登、詔減田租市租之半、

とある。民衆の生活を顧慮して貸息を蠲し、軍糧の徵發を免じ、田租や市租の減省をも行つて居る。天會二年二月のところに

庚寅詔命給宗翰馬七百疋田種千石米七千石、以賑新附之民

とあり、同四月のところに

癸未詔曰、新降之民訴訟者衆、今方農時、或失田業、可俟農隙聽決、

とあつて新に降附した民衆の生活にも少からざる注意が拂はれて居る。天會三年七月に至ると

禁内外官宗室、毋私役百姓、

とあつて、中央地方の官吏のみならず、金室の一族なる宗室でさへもその權力によつて恣に人民を私役することを禁じ、又

己卯詔權勢之家、毋買貧民爲奴、其脅買者一人償五十人、詐買者一人償二人、皆杖一百、

とあつて、權勢の家が賣買形式によつてでも民衆を奴婢となすことが禁ぜられ、その權力によつて脅迫して買ふ者に對しては罰則さへ定められた。更に金史卷七六、宗幹傳には

天會三年獲遼主于應州西余睹谷、始議禮制度、正官名、定服色、興庠序、設選舉、治曆明時、皆自宗幹啓之、

とある。遼帝を捕獲して名實共に遼室の繼承者たることを完成した天會三年頃に至つては金室に於てもあらゆる方面に於て漢風制度の採用が企てられるに至つた。斯くの如き時代に金室が漢風の戸等賦役を採用して居たと見ても不合理ではなからう。金史太宗紀天會三年七月のところには

甲申詔南京括官豪牧馬、以等第取之、分給諸軍

とある。これは南京に關する詔だから、官豪と言つても當時に於ては漢族であらう。軍馬の徵發にも富力の等第を以てしたとすれば、當時既に戸等制が存したと見て支障なからう。而して當時金國はその漢風諸制度の設置に於て多く遼のものをそのまま採用した態度より見て、この戸等制も遼の遺制に倣つたのではなからうか。

遼國の戸等制に關しては遼史食貨志にはこれを徵すべき資料はないが、遼史卷一〇二、張琳傳を見ると、遼國倒壞の直前のことではあるが、天祚帝が當時南府

宰相なりし張琳を召して「軍國大計漢人不與」といふ遼國の舊制を無視して生女眞征討の事を一任した時、張琳の奏言に従つて漢兵十萬を徵發するに至つたことを傳へて居る。その時の記事に

仍詔中京上京長春遼西四路計戶產出軍、時有起至二百軍者生業蕩散、民甚苦之、四路軍甫集、尋復遁去、とある。斯くの如き國家の危急存亡に瀕した際に於ても兵員の徵發に戶產を驗した如くであるから、遼國にも漢人社會に關しては役を課するのに各戶の富力を標準とする制度の存したことが推定される。又興宗朝頃のことと推されるが范鎮の東齊記事には

契丹有馮見善者、予接伴觀酒、見善曰、觀酒當以其量、若不以量、如係役而不戶等高下、以此知契丹係役亦以戶等、中國可不量戶等役人邪、

とある。當時遼に戸等制の存したことは疑なからう。金天會初頃戸等制が採用されたとすれば右の如き遼の制に従つたのであらう。

金室の愛民的政治は熙宗朝に至つて益々進展したことは周知のことである。太宗朝以來北宋を追つてその遺衆を容れ、又南宋人をもその文化的指導者として利

用し得るに及んでは、單に北朝たる遼の後繼者たるのみならず、中原正統國家的理想をも抱き、盛唐や北宋の制度文化をも採用して國家制度の整備や漢風文化の發揚に力めたことは著名なことである。然し熙宗朝に於ては未だ宗室大臣を初め上層女真人に於ても漢的文化の攝取に好意を有たざる保守的分子が多く、これがその首都が漢地より遠く辟在して居ることと相俟つて漢文化浸透の大なる障壁となつて居たことは事實である。この障壁は海陵の宗室大臣の殺戮と漢地遷都によつて略々除去されたことは言ふまでもない。太祖朝に於て既に攝取され始めた天下一家の支那的人道主義的政治理念も太宗熙宗兩朝を以て次第に發達し、海陵に至つては世界國家的一天下の理想にまで進展し、その華化政策の基礎理念を成すに至つた。天下一家の思想は支那人の心に於ては所謂中華思想と結び付いて居る。天下萬民を一家と見るのも畢竟中華的禮教を有することを條件とする。されば天下一家の思想をそのまゝ攝取することは必然的に自らの中華化の要請となる。

然し政治や文化は超時間的なものではなく、必ず歴史上自らに先行する情勢によつて條件づけられる。如

何なる新なる政治を本源的に開始せんとし、新なる文化を根源的に扶植せんとする場合にも、それに先行する歴史的民族的情勢は少くとも清算され、解決さるべき課題として既に與へられて居るのである。宗室大臣等保守分子の大量的殺戮、地方土豪的性質を帶び來つた世襲萬戸官の廢止、首都の漢地への移轉等によつて海陵の華化政策の支障となつて居た女眞的先行情勢は飛躍的に解決された。然しこれによつて女眞人的精神の歴史性が完全に除去されたのではない。

女眞人的な精神は華化政策を採つた海陵その人にも尙存した。彼の南伐の如きも寧ろこの精神の顯現とも見られなからうか、熙宗を弑して篡奪し萬障を排して華化政策の一路を直進し、國力を顧慮せず一天下の理想の實現に邁進した異常な實行的精神は直截で衝動的意志的な北方民族の心と相通するものがあるのではなからうか。一天下思想を支那的抽象的に觀念化することなく、現實の世界帝國の形で實現せしめようとした意欲は、現實的な北方民族の心に於ける知識と實踐との即目的同一化の現れではなからうか。彼の失敗と悲劇も亦その點に由來する。

海陵の一統しようと欲したのは金、南宋、西夏、高麗の四國であつた。これが海陵の意識した天下であると共に實際當時に於ける世界であつたであらう。斯くの如き廣大（東北滿洲をも含めた）な世界に唯一の國家のみが存在するといふ世界帝國の出現は當時の歴史的現實に於ては許されないことであつた。その世界が唯一の民族のみから成立して居ないやうに、亦それは唯一の國家によつて支配されることは出来なかつたのである。そこにはいくつかの主體的な國家の並存すべき歴史的必然性があつたのである。この世界の現實より遊離し抽象的な漢的一天下の理想に沿はしめられたところに海陵南伐の悲劇的運命があつた。

又海陵の重ねての遷都造營と南征には當時の金國として人的物的に最高度の資源の動員が行はれた。然し當時の金國は斯くの如き過重な總動員をなし得るに十分な國內體制が整備して居たのではなかつた。即ち契丹人を初め遼國遺衆や北宋遺民の漢族を含めた新金國に於て統制的な總力體制は未だ完成して居なかつた。遼國を倒してから引き續き起つた對宋外交と征戰の重要性の爲に契丹人の統制も北宋遺民強豪の制壓も未だ

十分には行はれて居なかつた。そこには可成り廣範圍の非集權的な自由と自治が許されて居た。當時の金國は斯くの如き異民族併存の状態で同民族的混一的な構成など勿論成つては居なかつた。天下一家の支那的思想は攝取されても、右の如き種的關係の現實は嚴然として存して居た。斯くの如き内部的狀態に於て、總力體制下の國家にして始めて企圖し得る如き國力の總動員を敢てしたところに海陵南伐失敗の理由もあつた。

金の國初に於ける全體的意識は種族言語等を同じうする征服者女真人を主體とした總力體制の指導力であつた。そこでは過重な人的物的資源の動員も可能であつたかも知れぬ。これを契丹人漢人をも含んだ大金國全體に普遍化さうとしたところに海陵の無理があつた。

而して既に被征服者たる漢人をも重要分子として漢化した組織の大金國に於て女真人の全體的意識は昔日の如くではなく、又既に漢地に在つて華化しつゝあつた女真人兵士には國初の如き素朴性も尙武的精神もなかつた。徒に大規模な金軍の動員も豫期の如き戰鬪力を發揮し得なかつたのみならず、先づ兵員の徵發を拒んだ契丹人の叛亂が興り、次いで經濟的負擔の過重に憤

恣を抱ける漢人の擾亂があつた。金の國內的な現實の情勢を顧慮しなかつた海陵の雄圖はあまりにも脆く崩壊した。これが北族の素朴な實行的精神と結び付いた支那の一天下思想の運命であつたであらう。そこには世界帝國理念に對する民族併立といふ歴史的現實の規定性が顧みられず、種族的封鎖差別感情の強度が反省されて居なかつた。普遍的抽象的な漢的思想が素朴にも直接的に攝取されて北族的な心と結び付いたのである。單に一天下思想のみならず、海陵の華化政策とその漢風制度の設置全般に右の如き色彩が認められる。

次に出でた世宗の負はされた問題は、直接には海陵の無謀にも惹起した事變の處理、即ち對宋外交の調整、契丹人叛亂の鎮定や漢民の安撫と治安の恢復であるが、結局は一天下的世界帝國理念の是正と女眞的北朝意識の確立、國內種族問題の解決、財政經濟制度の整備、漢文化攝取等の問題であつたであらう。

海陵南伐失敗の後に鑑みて金室の武力と政治力の限度を知つた世宗は一天下思想を止揚して集權的國家の完成を期し、契丹族の叛亂や漢族の擾亂を定めて、これが統制を強化したのみならず、征服者たる女眞族の

向上と獨自性の主張と共にその統制の強化をも怠らなかつた。然しその國家意識は北朝的で女眞主義を主調として、漢族と共に漢文化をも重視する漢的色彩を濃厚に有するものであつた。國初より攝取され、熙宗海陵を経て次第に浸透して來た人道主義的な天下一家の思想は集權的な國家意識や女眞主義の規定を受けつゝ、尙政教の理想として行はれて居た。

世宗の女眞主義の堅持には彼自身に深刻な體驗があつたのである。金史卷八八、唐括安禮傳には

起復尙書右丞相、詔曰、南路女直戸頗有貧者、漢戸租佃、田土所得無幾、費用不給、不習騎射、不任軍旅、凡成丁者簽入軍籍、月給錢米、山東路沿邊安置、其議以聞、浹旬上問曰、宰臣議山東猛安貧戸如之何、奏曰未也、乃問安禮曰、於卿意如何、對曰、猛安人與漢戸今皆一家、彼耕此種皆是國人、即日簽軍恐妨農作、上責安禮曰、朕謂卿有知識、每事專倣漢人、若無事之際可務農作、度宋人之意且起爭端、國家有事、農作奚暇、卿習漢字讀詩書、姑置此以講本朝之法、前日宰臣皆女直拜、卿獨漢人拜、是邪非邪、所謂一家者皆一類也、女直漢人其實則二、朕即位東京、契

丹漢人皆不往、惟女直人偕來、此可謂一類乎、

とある。金國成立の原動力となつた女真人を被征服者たる漢族と同一視し、兩者の金國に於ける使命をさへ區別せざらんとした唐括安禮の如き女真人が、世宗朝中期に於て高級官吏たりし事實も注意すべきであるが、これを嗜めた世宗の心裡には右の如き體驗の裏付けのあつたことも興味あることである。世宗が海陵失脚の後を受けて東京遼陽に自立した時、彼の擁立に参加した者に契丹人のみならず、漢人さへ全くなかつたといふ事實は、金室が結局は女真人の支持によつて維持されて居るといふ現實をしみじみ感ぜしむるに十分であつたであらう。

斯くの如き體驗の基礎の上に立つた世宗の女眞主義は、單に有功近親の上層女真人に信頼したのみならず、下層貧窮女真人にも十分の注意を拂つた全女眞主義にまで進展したが、然し遂に女眞至上主義にまでは至らなかつた。世宗の全女眞主義の堅持は、國初以來金室によつて攝取されて來た天下一家思想の止揚といふ歴史的地盤の存したことも注意せねばならぬ。更にこれに就ては彼の境遇をも顧みる必要がある。

世宗の母方の家は世々遼陽に住した李氏で、遼に仕へて政治的にも重要な地位に在つた程であるから、漢的教養の深き家なりしは疑ない。彼の生母貞懿皇后も亦相當教養ありし人のやうで、佛教的信仰も厚かつた如くである。世宗がこの母方の血のみならず、その文化的感化を受けたことも想像に難くあるまい。彼が初より漢文化に對する理解のありしも當然であらう。且つ彼の舅氏は貞懿皇后の弟李石で、その教導の多かりしことも考慮せねばならぬ。金史卷八六、李石傳には大定元年以定策功爲戸部尙書、無何、拜參知政事、何瑣殺同知中都留守蒲察沙离只、遣使奉表東京、而羣臣多勸世宗幸上京者、石奏曰、正隆遠在江淮、寇盜益起、萬姓引領東向、宜因此時直起中都、據腹心以號令天下、萬世之業也、惟陛下無牽於衆惑、上意遂決、即日啓行、

とある。斯くの如く世宗が李石の意見を容れて首都を燕京に定めざるを得なかつたところに、爾後の金室の政治的方向の運命があつたやうに感ぜられる。

女眞主義による天下一家思想の規定、天下一家思想による女眞主義の規定、この兩者の止揚こそ世宗政治

の指導理念であつたであらう。女眞精神の作興と同時に儒教的教養の重視、貧窮女眞人の救済を策すると共に漢的財政經濟政策の確立等はその傾向の表れであらう。漢族強豪を制壓するのみならず女眞富豪の利益をも制限して、貧窮女眞人の生活上のみならず、貧窮漢人をも救済し、女眞漢兩族の利害を調和せしめんとしたことは右の如き政治の方向に沿つたものであらう。

殊に財政經濟政策の漢的合法化は國粹精神の作興と共に世宗の最も苦心せるところであつた。海陵は前にも一言した如く華化政策を採りつゝも、漢族社會殊にその經濟方面の實際に就て理解少く、實狀を無視して民生に不當な壓迫を加へ、漢地行政を紊亂せしむるに至つた。その後を受けて時局の拾收に當つた世宗の政治が財政經濟方面に於て漢的合法化の傾向の強かつたのは當然であらう。海陵が直接的形式的漢文化の攝取をなしたるに對し、世宗は金國の現實に即してその政治を實質的に漢化せしめたと云へよう。金史卷七、世宗紀中、大定十四年三月甲午のところには

上謂大臣曰、海陵純尙吏事、當時宰執止以案牘爲功、卿等當思經濟之術、不可狃故常也、

とあつて、海陵時代に於ける金室の政治は専ら吏事を尙び、文書の考案作成を以て功とし、單に事務的形式的に漢風の傳統に沿はんとしたのみで、眞に民人の生活や經濟の實情に即して政治せんとする注意や努力が足りなかつたやうである。賦役に於ても民衆の負擔過重となるのも顧みなかつた如きは、一面北族の能力を以てする俘掠や略奪的精神の殘滓とも見られるが、他面當時の華化が形式的表面的に止つて居た事實を物語るであらう。漢的形式による北族精神の暴露、これが海陵政治の實際であつたかも知れぬ。世宗はこれに鑑みて民衆の生活や經濟の實情に注意して漢族社會の經濟原則に即した財政經濟政策を樹立せんとし、漢風の「經濟之術」を重んずるに至つたのであらう。海陵時代の不當な賦課は或はこれを廢止し、或はこれを合理化して負擔の適正とその均衡を得しめんと心懸けたもののやうである。大定四年に行はれた物力通檢推排の確立もこの趣旨に従つて企てられたものであることは言ふまでもない。然し世宗朝の初期には海陵以來の財政上の放慢政策と引き續く戰爭のために財政の餘裕がなく、海陵の興した不當の賦課の中、直ぐには廢止し

得なかつたもののあつたのも無理のないことと言はねばならぬ。金史卷七三、宗尹傳には

上問宗尹、對曰、……海陵軍興爲一切之賦、有菜園房稅養馬錢、大定初軍事未息、調度不繼、故因仍不改、今天下無事府庫充積、悉宜罷去、上曰卿留意百姓、朕復何慮、大尉守道老矣、捨卿而誰、於是養馬等錢始罷、

とある。海陵の始めた稅錢の中にも、大定中期に入り、平和も永續して國庫充實するに至つて始めて罷められたものも多くあつたやうである。世宗の初期には財政窮迫のため人民の負擔輕減も思ふやうになし得なかつた事情に在つたことが分る。然し世宗はその愛民政治の見地より、差し迫つた財源の調達にも、漢人社會の傳統に沿うて合法的な手段を撰ぶことを怠れなかつた。當時引き續く戰亂の中に在つて、兵士の食糧等前線に於ける物資の供給に困難を感じたことは言ふまでもない。その對策にも恣意的な徵發に訴へず、漢的な合法的手段によつて、これが調達を計らんと力めたやうである。金史の和糴（卷五〇、食貨志五）のところを見ても知られるやうに、皇統二年既に行はれて居た和糴

法を強化して、兵糧や備荒のための府庫の充積を圖つたやうである。完顏守道傳（卷八八）大定二年のところに

未幾改太子詹事兼右諫議大夫、馳驛規畫山東兩路軍糧及賑民饑、守道籍大姓戶口、限以歲儲使盡輸其贏入官、復給其直、以是軍民皆足、

とある。この他收益稅的な城郭出賃房稅、金銀坑冶開探の稅、專賣或は消費稅的な鹽、酒、醋等の權制や征商のみならず、入粟補官度牒の制等をも或は強化し、或は新設して財政收入を補つたやうであるが、何れも漢人社會に於て妥當な方法によつてその目的を達せんとしたことは、金史食貨志（卷四八、四九）を一讀しても知られるところである。更に食貨志租賦（卷四七）大定二年五月のところには

有言以用度不足、奏預借河北東西路中都租稅、上以國用雖乏民力尤難、遂不允、三年以歲歉、詔免二年租稅、

とある。財政窮乏救済の爲め、租稅を預借せんとした當局官吏の主張は、民力を害ふの故を以て世宗に斥けられ、その翌年には却て前年の租稅が免ぜられたとこ

ろもあつたやうである。大金國志卷一六に

及將用兵、又備民間稅錢五年、民皆怨憤、是時中原豪傑並起、大名王友直、濟南耿京、太行陳俊、倡集義衆、而契丹之後耶律窩斡、亦興於沙漠、於是渤海一軍、萬人叛之、

と傳へられて居るが如き海陵弊政の後を受けて事變の處理に當つた世宗の政治が右の如き性格を帯びたのは寧ろ當然と言ふべきであらう。金史卷四七、租賦大定二年五月のところに

謂宰臣曰、凡有徭役均科強戸、不得抑配貧民、

とある。世宗は徭役が強戸より貧民に抑配される危険性があつて負擔の均衡を監視する必要のあることも注意して居る。同三年のところに

詔曰、朕比以元帥府從宜行事、今聞河南陝西山東北京以東及北邊州郡調發甚多、而省部又與他州一例征取賦役、是重擾也、可憑元帥府已取者例蠲除之、

とある。戰時に於ては出先軍部の調發が過重される可能性があるので、中央政府の課する賦役が重複する時はこれを免除せんと心懸けたやうである。又兵志(卷四四)、養兵之法のところに

世宗大定三年南征軍士每歲可支一千萬貫、官府止有二百萬貫、外可取於官民戸、此軍須錢之所由起也、

時言事者、以山東河南陝西等路循宋齊舊例州縣司吏弓手、於民間驗物力均敷願錢、名曰免役、請以是錢贍軍、至是省具數以聞、詔罷弓手錢、其司吏錢仍舊

とある。當時は軍費膨脹し國庫の經常收入のみでは到底支辨し得ず、莫大な軍費が出先軍部により軍須錢の名を以て臨機に官民より調達されて居た。又山東、河南、陝西等の齊國の舊領内の州縣に於ては宋や齊の舊例に従つて司吏錢、弓手錢等の免役錢が民戸の物力を驗して課賦されて居たので世宗はこれ等の公課をも整理せざるを得なかつた。仍て州縣に於ける司吏錢等の免役錢を以て軍須錢に當てることとし、弓手錢はこれを廢罷したやうである。更に同養兵之法のところには(大定)四年六月奏、元帥府乞降軍須錢、上曰帥府支費無度、例皆科取於民、甚非朕意、仰會計軍須支用不盡之數、及諸路轉運司見在如實缺用、則別具以聞とある。既に戸等制の存せし當時に於ては、軍須錢と雖も勿論民の富力を見てこれを賦課したであらうが、これは定率税ではなく、必要額を各戸に割り當てる配

布税的たるを免れないから、軍費膨脹し、當局の不正の加はるに従つて民の負擔は過重となる危険がある。

斯くの如き軍費による民生壓迫の可能に對しても世宗の顧慮は十分に加へられて居た。亦世宗愛民の至意の表れと見るべきであらう。この詔令の出でてより僅かに數月にして物力通檢法の整備が實現されたのである。差し迫つた軍費必要の爲の民衆の負擔輕減が所期の如く出来ぬので、出来得べくんばその均衡を得しめんとしたのは當然であらう。こゝに問題とする物力錢法の確立は斯くの如き當時の財政的緊迫と世宗の愛民政策との調和の上に實現されたものと言へるであらう。

畏友佐伯富學士の示教に據ると、物力錢なるものは南宋にも存したやうである。然し未だこの物力錢の性質もこれと所謂戸等制との關係も全く不明の中に在るので、今直ちにこれと金代物力錢との關係を加へることは出来ないが、年代の關係より、世宗大定四年の物力錢法の整備には、南宋物力錢法の影響があつたと見られぬこともない。

兎もあれ、金の物力錢法は金國の財政的必要と當時の漢人社會の經濟的實情との要請に照して整備された

ものなることは疑ない。

唐の均田法が有名無實となり、土地の個人私有が支配的となるや、税法としての租庸調制も益々その妥當性を缺くに至り、遂に德宗建中年間の兩税法の施行となつた。これは尙古的な支那人からは、聖賢の道に叛くものとして、轟々たる非難的とはなつたが、時勢の趨くところ必然的に推移して個人私有の財産を課税の標準とすることは爾來支那税法の原則となるに至つた。この法も當初は墾地の所有面積を標準として各戸の財産に等級を附したが五代頃に至つては遂に純粹な地租的性質のものと化してしまつた。

社會の經濟は發達し、商業や貨幣經濟の飛躍的な發展に伴つて所有耕地の面積のみが決して人戸の富力を表示するものにあらざる事實を見逃し得ざるに至つた。都市の經濟的發達の顯著なるものあるに至つては、土地の如きも純粹な農耕に使用されるよりも、園藝や建築地等に使用される方が却つて多額の收益を齎すに至り、土地の位置と使用法の如何によつてその收益にも多大の相違を生じ、土地値段の懸隔に甚しきもののあることが推される。社會の發達が斯くの如きに至つ

ては耕作地以外に収益源となる資財の種類も多く數へられ、人戸の財蓄積の手段は多種多様となつたであらう。斯くして各戸の財産課税の擔税能力は、その所有土地の面積とは著しく懸絶するに至り、墾地の面積のみを以て各戸の財産に等級を附した兩税法は總合財産税としての意義を全く失つてしまつた。こゝに於て兩税法は地租化して主として純粹な農耕地を課税の標準とし、同時に耕作地以外の収益源となる資財を標準とした特別税の創始を必要とするに至つた。五代後梁の時に始められたと推せられる屋税や地税は斯くの如き要請に應じて生れたものであらう。北宋時代に至つても民佃官地の小作料なる「公田之賦」、兩税に當る「民田之賦」の他に「城郭之賦」として宅税や地税があつて財産課税として重要な意義を有して居た。その他には人頭税的な「丁口之賦」や消費税的な「雜變之賦」等があつたがこれは直接税的財産税的のものではないであらう。

北宋を倒した金にも民佃官地の小作料なる官田の租、民戸私有の耕地面積を標準として課税する私田の税のあつたことは既述の如くであるが、この他に出賃房税

や金銀坑冶開採の税の如き収益税的のものや商税や專賣等の如き消費税の存したことは金史食貨志によつて明かである。然し直接民戸の私有財産を對象とする一般的課税としては地租的な私田の税の他にはこゝに問題とする物力錢が主たるものであつたやうである。されば税としての物力錢は北宋時代に宅税や地税の形式で課税された如き都市に於ける官吏や商工業者の抱擁する諸種の財産的収益源をも重要な課税標準としたのは當然であらう。五代や北宋に於て行はれた兩税以外の諸種の財産税は金に於てはこの物力錢に統一されたと云へるであらう。

然し北宋時代に於ては、「民田之賦」が主として地方の耕地を課税の標準としたるに對し、その他の諸種の財産税は「城郭之賦」なる名稱によつても知られる如く、都市若しくは商工業者等に限定され、地方的人的に無制限なものではなかつたやうである。然るに金の物力錢は既述の如く地方的にも人的にも制限がなく、漢人社會全般に互つて各戸の収益源なる全財産を標準として課税された綜合財産税である。斯くの如き綜合的な財産税の成立したのは、これが北宋時代既に各戸

の全財産を標準として行はれた戸等制と合流したからであらう。從來の諸種の財産課税が戸等制と合流して、地方の農耕地面積をも含めた一般財産を標準とした物力錢となつたので、同じく財産税なる農耕地面積を標準とする私田の税とこれとの調和が問題となつたのは當然であらう。既述の如く、「民地已納税、又通定物力、比之浮財所出差役、是爲重併也」との提言があり、「遂詳酌民地定物力減十之二」なる結末を見たのは右の如き理由に基くものであらう。

前述の如く物力錢の財産税としての面も漢人社會に於ては重要な意義を有するものであるが、世宗がこの税額の査定に特に意を用ひたのは物力錢の差役や免役錢の課徴標準としての面を一層重要視したからであることは既述の如くである。されば世宗大定四年の物力通檢法の確立は天會初期以來採用されて居た差役や免役錢の標準としての民戸の富力等第の整備として重要な意義を有するものである。

世宗はその國粹主義の立場より漢族社會の制度や慣習はなるべく女眞社會に浸透せしめない方針であつた。然し固より漢文化に對する受容面の大きなりし上に既に

漢族經濟文化の眞只中に身を投じて居る女眞人の漢化は必然的に世宗の女眞社會に對する政策をも漢文化的たらしめねば止まなかつた。既述の如き猛安謀克戸に對する推排法の採用は女眞人の官吏登用にも漢文化的色彩の多い科擧法を課し、猛安謀克戸にも耕作能力の足らざる者には租佃法を公許したことに共に、右の傾向の表れと言ふべきであらう。海陵時代の文化の攝取は尙形式的表面的なりしが、國粹主義を堅持した世宗治下に於て女眞人は却つて實質的に支那化する運命に置かれて居たのである。殊に右の漢風科擧法の採用は漢文化主義にその道を通じて居る。

五、結 論

金の物力錢査定方法なる物力通檢推排は、往々、北宋の神宗熙寧年間の手實法に當比せられる。趙翼の十二史劄記にも金代推排の法に就て記述した後次次の如く論じて居る。

按金代推排之法、與宋呂惠卿所創手實法相似と言ひ、この手實法に就て略述し、この法に對する當時の非難を記した後に

故神宗於王呂所創新法不改、而獨此手實之法特詔罷之、以宋暫行即罷之敝政、而金代數十年行之不變、故雖以世宗求治而無救於民病也、

と言つて、宋代に暫時行はれて廢罷されたこの弊政を金に於ては數十年間これを續行したと言つて、世宗の推排法を非難がましく論じて居る。

手實法は先づ官に於て田地やその他の財物の中價を定めて民に示し、民をしてその物價を標準としてその所有資産の價格を申告せしめ、隱匿する者あらば隣人の糾告を許し、その實ある時は被告人の資産の三分一を實に充てて以て申告の虚偽なからしめんことを期し、各戸の全資産價格の高下を等第して五等となし、簿籍を造つて公課負擔の均衡を得しめんとしたのである。

この法の採用された事情を見ると續資治通鑑長編卷二五四、熙寧七年七月乙卯のところには

司農寺言、五等丁產簿舊憑書手及戸長供通、隱漏不實檢用無據、今熙寧編敕但刪去舊條、不立新制、即於造簿反無文可守、甚爲未便、承前建議惟使民自供手實、許人糾告之法最爲詳密、貧富無所隱、誠造簿之良法、詔送提舉編修司農寺條例司、建議者前曲陽

尉呂和惠卿弟也、

とあり、又同癸亥のところには

呂惠卿獻議曰、免役出錢或未均、出於簿法之不善按戸令手實者令人戸具其丁口田宅之實也、嘉祐敕造簿委令佐責戸長三大戸錄人戸丁口稅產物力爲五等、且田野居民耆戸長豈能盡知其貧富之詳、既不令自供手實則無隱匿之責、安肯自陳、又無賞典孰肯糾決、以此舊簿不可信用、謂宜倣手實之意使人戸自占家業、如有隱匿即用隱寄產業賞告之法、庶得其實

とある。この法は民戸自らの資産價格の申告と隣人の告奸に重點を置いた制度である。又この法に對する非難も主としてこの申告と告奸に向けられて居たやうである。宋史卷三二九、鄧綰傳には

初惠卿弟和卿創手實法、綰曰、凡民養生之具日用而家有之、今欲盡令疏實則家有告許之憂、人懷隱匿之慮無所措手足矣、商賈通殖貨財交易有無、不過服食器用米粟絲麻布帛之類、或春有之而夏以蕩折、或秋貯之而冬已散亡、公家簿書何由拘錄其勢安得不犯、徒使囂訟者趨賞報怨、以相告許畏怯者守死忍困而已、詔罷其法、

とある。然るに金の物力推排法に於ては既述の如く、本人の申告や地方人の推唱を求むることは、この手實法と同じであるが、それは主として參考に供するのみで、これに重點を置いたのではなく、且つ賞告の規定もなく、金室としては告奸は却つて弊害として避けんとする態度であつたやうに感ぜられる。金室は専らその派遣する特使の裁量に信頼し、その自由なる判斷を以て決定せしめんとしたやうである。公課負擔の基準となるべき民戸富力の實際を捕捉せんとする趣意に於ては兩者共に同じであるが、その目的を達する手段に於ては各相違が認められる。同じく漢族社會に於てその賦役課徴の標準として傳統的な物力等第の法を實施するにも、手實法に於ては告奸賞告が結局の依據であり、推排法に於ては特使の自由なる判斷が最後の決定權を有して居る。前者には漢族社會に根ざして居る個人主義的利己意識を利用せんとする心があり、後者には官吏の良心的判斷とその精勵に對する信頼の念がある。法と現實とを媒介するものは政治である。手實法と推排法との相違は結局宋金兩國の爲政者の政治的態度の相違を意味するものではなからうか。手實法は既

掲の如く告奸賞告の民政上に害あるを理由として一年三ヶ月で廢止され、又舊來の法が復活された。その舊來の法とても簿籍の作成は専ら書手、戸長等地方自治團體の役員に委任して事務的に處理せしめる結果となり「隱漏不實、檢用無據」の狀態に放認して文雅無爲の政治に安住し居たやうである。これを地方長官にも一任することなく、金室の信頼する特使を任命して、孜孜としてこれを督勵して、民戸富力の推排に實據あらしめんと力めた態度に比すると可成りな相違が認められる。金は北宋の後を襲ひ、その成敗の跡を見て歴史的教訓を得たことも多少あるであらうが、矢張り、女眞漢兩種族の種族性に基く生活感情や政治意識の相違にも由るのではなからうか。

世宗自ら勤儉奉公、滅私愛民の君主なりしことは金史の世宗紀やこれに相當する志や列傳を見れば明らかに知られるところであるが、彼がその漢族に對する愛民政治に於ても眞に信頼し得た臣僚は寧ろ漢族出身者にあらずして、却つて女眞人出身の政治家であつた。世宗が或は「盡忠」と評し、或は「留意百姓」として信頼したのは何れも女眞人出身者であつて、漢人臣僚

に對しては「爲利而已」と評し、曹望之、梁肅等の如き有能顯功の官吏に就ても「上書言事蓋觀執政耳、其於國政竟何所補達」と述懐して居る。斯くの如き漢人官吏の態度は彼等が金國構成員となりしは被征服者としてであり、その金室君主權との結び付きは當初は利益感情を主調とする相互依存關係であつた爲め、金室に對する忠誠も金國に對する愛着も種族的感情より餘り強くなり得なかつたといふ理由も存するであらうが、その同種族なる漢族に對しても女真人より却つて酷薄なる者ありしより見て、漢族本來の生活感情の個人主義的なりし理由にも基くのであらうと考へられる。女真人は一般北族と等しく純直にして全體意識が強い。北風揚沙錄等が勃興當初に於ける女眞族に就て記して居るのを見ると、當時の女眞社會には平等意識が比較的強く、集團意識も共同體的全員寛容的な色彩が濃厚で、建築の良否によつて推擧される可能性多く、論功行賞も領主に對する忠誠といふやうな封建的色彩少く、集團のために奉公したといふ全體主義的のものであつた。又勃興當初の女眞社會では軍律も法令も甚だ嚴重で残酷とさへ感ぜられるものさへある。これは

專制的支配者の強制的命令の如きものではなく、純直にして簡潔な共同體的精神に基くものと言ふべきであらう。斯くの如き直截な女真人の心に於ては漢風の禮教も一旦これを理解すれば率直に實行せんとする意欲に移されたであらう。儒教的政教の理想も世宗の女眞的な純直にして全體的な心に於て生かされて彼の愛民の至情となつたのであらう。天下一家の思想も彼に於ては滅私奉公の全體主義的意識の中に動いて居る。今一例を示すと金史卷四八食貨志三、錢幣のところには（大定）十五年十一月、上謂宰臣曰、或言鑄錢無益、所得不償所費、朕謂不然、天下一家何公私之間、公家之費、私家得之、但新幣日增、公私俱便也、とある。彼にとつては皇家の利も民間の利も全く同じであつたのである。彼が身を持つること極めて儉素で政治に精勵したのも斯くの如き女眞的な精神と相通するものがあるのではなからうか。物力等第簿更改の爲め特使を派してその均衡を得しめんと期した如きも、金國政治の集權性より來る點もあつたであらうが矢張り政治への信頼と精勵の表れとも見られるであらう。度し難い利己的な漢族社會に對してその認識が足りな

かつたとの誹はあるであらうが、世宗愛民の誠實性の存するところは認めねばならぬ。

斯くの如き世宗が上に在つて孜々として官界の肅正、吏道の刷新に力めたので、當時金室の政治は大いに振つたと言へるだらう。然し漢的な經濟や文化の具有する個人主義的な意識は單に漢族社會を支配したのみならず、これと雜所する女真人にも不可抗的に浸透して女真人の個人主義化をも來たさしむるに至つて居たことは多く資料の徵すべきものがある。北族の全體意識は原生的で理性的訓練を経て居ないもので、外敵に對しては頗る熾烈となるが、殊に經濟面に對しては多くの危弱性を有つて居る。且つ純朴なる精神が失はれると、禮教も既に實踐の倫理ではなく、懦弱な文化人の單なる教養として意義を有するに至る。漢文化は純直實踐的な女眞の心に於てではなく、支那的な心を以てその享受が行はれるに至る。この傾向が勿論世宗時代既に存したことは周知のことである。金史卷七、世宗紀中、大定十六年正月丙寅には

上與親王宰執從官從容論古今興廢事、曰、經籍之興其來久矣、垂教後世無不盡善、今之學者既能誦之、

必須行之、然知而不能行者多矣、苟不能行、誦之何益、女直舊風最爲純直、雖不知書、然其祭天地敬親戚尊耆老接賓客信朋友、禮意款曲皆出自然、其善與古書所載無異、汝輩當習學之、舊風不可忘也、とある。

世宗が國粹的女眞精神の作興に熱心なりしは有名なが、それは血縁を重んじ祖宗を崇び純直自然、尙武實踐的な女真人固有の精神を復活せしめんとしたのである。その直接手段として宗室大臣を率ゐる舊都會寧に赴き女眞の舊俗を見學せしめ、又燕飲音樂衣服器物に於ても漢風を斥け舊俗を昂揚し、且つ淳儉の風に還らしめんとした。女眞語女眞文字學の振興や女眞姓の尊重と漢風改姓の禁止も亦この目的に沿はんとしたものである。然し世宗のあらゆる努力に拘らず女眞舊精神の復活は遂にこれをなし得なかつた。女眞社會が固より封鎖性比較的少く、漢風文化の受容面の大なりしは既述の如くである。日本の如く海を隔てた島國ならば大陸文化に對し、その受容は自然的にも調節され得るが、金國は漢族國家と地續きなる大陸國家なる上に漢族をも重要な構成員としてこれを包含し、且つ遼國

の遊牧性濃厚なる契丹族とは異り、農耕を主とする金國の女眞族は既に積極的に漢人住地に進出してこれと雜所して數十年を経て居る。漢文化浸透の不可抗的で選擇的受容や、その止揚の餘裕も失はれるに至つたことは蓋し當然と言ふべきであらう。更に漢地移住者の奢侈化情弱化は上層富家に於てのみならず、下層貧なる者も亦これに倣ひ、その貧窮化無氣力化を促進せしめた。

而して世宗の全女眞人主義と言つても、只夙に下層女眞人にも留意したと言ふのみで、主として漢地及びこれに準すべき地方の居住女眞人を對象とし、既に漢化した女眞人の精神作興やその貧窮救済の程度にのみ止つて、依然として北滿の原住地に在つて舊態を保存して居た素朴純直な女眞人を奮起せしめて人的分子として新に金國政治に加入せしめんとする努力は少かつたやうである。女眞人の科擧法も固定した金國の舊秩序の殻を被つたもので、純直な新分子の擡頭に坦路を開かんとする用意は足りなかつたと言へよう。金史卷四六、食貨志一、戸口大定二十年には

以上京路女直人戸規避物力、自賣其奴婢致耕田者少、

遂以貧乏、詔定制禁之、

とある。比較的舊風を保存して居る筈の上京路の女眞戸に於ても、軍役負擔の基準となる物力を忌避する者あるに至つたのは、金國組織の漢地化漢族化と共に女眞本土地の遊離性と當局政治方針の不徹底の結果とも言へるだらう。形式的な女眞風の復舊は比較的容易にこれをなし得ても素朴純實な精神の恢復は一度これを失つた者には容易な事ではなかつた。

又世宗の女眞精神の作興には右の如き直接な國粹復古の運動のあつた他に積極的な漢風文化攝取^③の一面のあつたことも注意せねばならぬ。既述の如き「經濟之術」習熟の獎勵や女眞科擧法の採用はその傾向の表れであらう。金史卷八、大定二十三年八月己巳には

譯經所進所譯易書・論語・孟子・老子・楊子・文中子・劉子及新唐書、上謂宰臣曰、朕所以令譯五經者、正欲女直人知仁義道德所在耳、命頒行之、

とある。五經四書その他の經籍や史書を女眞語に譯して頒行せしめんとしたのは女眞人をして仁義道德の所在を知らしめんとする爲めであつた。同大定二十四年七月のところには

乙卯、上謂宰臣曰、今時之人有罪不問、既過之後則謂不知、有罪必責則謂每事尋罪、風俗之薄如此、不以文德感之、安能復于古也、卿等以德輔佐、當使復還古風、

とある。當時の女眞社會に於ては法令嚴酷賞罰必行の舊風は失はれ、風俗薄きに趨くこと甚しきに鑑みて、世宗は文德を以て補つて理性化し女眞人の精神を舊風に還らしめんと期した。又彼の漢的思想攝取の指導的漸進的なりしことは次の記事によつて知られる。金史卷五一選舉志一策論進士大定二十八年のところに

諭宰臣曰、女直進士、惟試以策、行之既久、人能預備、今若試以經義可乎、宰臣對曰、五經中書・易・春秋已譯之矣、俟譯詩禮畢試之可也、上曰、大經義理深奧、不加歲月、不能貫通、今宜於經內姑試以論題、後當徐試經義也

とある。五經の中書經・易經・春秋の譯が既に成り、更に詩經・禮記の譯が完成した曉には、五經の經義を以て科擧に試せんとの見解もあつたが、世宗はしばらく論題を試して、後徐に經義を試せんとする態度を持したやうである。

斯くの如き企圖に基く漢文化の攝取もこれを活用し得る女眞人固有の精神が失はれてしまつて居ては、その所期の目的を達することは出来なかつたらう。攝取された漢文化は女眞的な精神に於てではなく、女眞人の支那化された心に於て享受されざるを得なかつた。漢風經濟文化の攝取は世宗の企圖に反して女眞人をして個人主義化、懦弱化の方向に驅り立て漢族風の文雅の漢文化主義への道を開いたやうである。

然し世宗朝に於ては世宗を初め多くの臣僚の中には北滿の原住地に人となり、未だ素朴なりし女眞舊風を體し、これが復活を願ふ者もあつたが次の章宗時代に入つては既に漢地に生れ漢地に育ちしもののみ多く、女眞舊風が全くその跡を斷つたかの感がある。章宗は祖父の遺訓を奉じて國粹主義を唱導するが、それは全く形式的でその實際爲すところは多く北朝の主體性を逸脱した漢文化主義の軌道に登つて居る。斯くの如き時代に至つては吏道も衰頹しこゝに問題とする物力錢法の運用も昔日の如くではなく、漢族社會に有り勝ちな弊政の伴ふこと益々多くなるのは當然で、その肅正の必要を感じて世宗大定四年通檢の際の條理や罰則の

嚴正化を主張した者は既述の如く却つて高汝勵の如き漢族出身の官吏なりし（既掲金史一〇七、張汝勵傳）は注目に値する。斯くの如く物力錢法の運用が所期の如くならざりし上に、これには金國末運の財政難とこれに關聯した不換紙幣の濫發といふ災厄の伴つたことは既述の如くである。

世宗の愛民的な精神に於て整備され運用された物力錢法に於て、既述の如く物力錢額の膨脹が熱心に警戒されたのは當然であらう。この精神は章宗にも繼承され最後まで物力錢額そのものは増大することがなかつたやうである。然しこれを標準として附課された免役錢的な税錢は金國財政の膨脹と共に増大して民生を壓迫したことは既述の如くである。金國の財政膨脹の主要な運命的な原因としては章宗時代の對宋戰爭に繼ぐ蒙古族³⁰⁾の勃興を第一に數ふべきは當然であらう。然しこれより早く官俸を受くべき官吏や軍人の數の増大が存したことも見逃してはならぬ。金史卷五五、百官志一には

大定二十八年在仕官一萬九千七百員、四季赴選者千餘、歲數監差者三千、明昌四年奏、周歲官死及事故者

六百七十、新入仕者五百一十、見在官萬一千四百九十九、內女直四千七百五員、漢人六千七百九十四員、至泰和七年在仕官四萬七千餘、四季部擬授者千七百、監官到部者九千二百九十餘、則三倍世宗之時矣、とある。金國の官吏は大定末頃より次第に増加して泰和年間に至つては世宗時代の三倍の多きに達して居ることを傳へて居る。斯くの如き官吏數の漸増が財政支出の増額を來したことは言ふまでもない。然しこの傾向は世宗朝の中期にも既に認められて居たのである。金史卷四七、大定十七年のところには

上問宰臣曰、遼東賦稅舊六萬餘石、通檢後幾二十萬、六萬時以何仰給、二十萬後所積幾何、戶部契勘謂、先以官吏少故能給、今官吏兵卒及孤老數多、以此費大、上曰當察其實毋令妄費也、とある。これは遼東地方のことではあるが以て一斑となすに足るであらう。

斯くの如く世宗時代より漸増の機運に在つた金國財政は章宗時代に入つては益々膨脹し、且つ世宗時代に兌換的であつた交鈔の發行は章宗朝柔佞好利の胥持國執政の間に官兵俸給の財源として不換紙幣化され、こ

に金國財政紊亂の兆は既に成つたのである。剩へ新興蒙古族の外患が加はつて金國財政は無限に増加し最後の破綻へと推し進められた。物力錢に附課された軍須錢等の税錢は莫大な額に上り、甚しく民政を壓迫するに至つたことは言ふまでもない。然しこれは物力錢法そのものの罪ではなからう。

補註

②⑤ 熙宗も海陵も自らは多分の女眞性を保有しつつ、その漢文化攝取の態度には漢文化の優秀性を無條件に肯定し、これに心酔した觀があつた。

②⑥ 三上次男、外山軍治兩氏「金正隆大定年間に於ける契丹人の叛亂」東洋學報二六ノ三、四所載參照。

②⑦ 北方民族は一般に異質の文化の併存に對する寛容性を有しつつも征服被征服等武力による種族的な階層關係を固執し、又種族的威嚴やその軍事的政治的優越性を保持せんとする傾向が強い。(拙稿遼韓氏傳說成立に關する史的考察、滿蒙史論叢第三、頁二五七—二六〇參照)。これが金世宗朝や清朝の場合に於けるが如く天下一家思想の規定を受けると、實際に於てはその本族を重要視しその特權を保持せしめようと力めつつも原則としては種族的階層關係を解消せしめ、諸種族が獨自性を有しつつ平等に一家であるとする政治意識となる。漢族の漢文化本位の中華的立場と異ると共に元朝の種族的階層關係を堅持し

て漢族漢文化を蔑視せんとした蒙古至上主義とも異つたものである。

②⑧ 日野開三郎氏「五代の沿微に就て」史淵一三所載參照。物力錢の課稅率は勿論明確にはこれを知る術もないが基準となつた大定四年のものは大體財産の實際價格の二十分の一位と推せられることは既述の如くである。大定四年大名東平兩路通檢使として物力錢査定の基準を示した梁肅の傳(金史卷八九)には

凡使宋者宋人致禮物、大使金二百兩銀二千兩、副。半之、幣帛雜物稱是、及推排物力、肅自以身爲執政、昔嘗使宋所得禮物多、當爲庶民率先、乃自增物力六十餘貫、論者多之、

とある。梁肅が詳問大使として宋に使し、禮物として宋より金二百兩銀二千兩及び幣帛雜物を得たるに對し、物力錢六十貫を増したといふ。金史卷四八、食貨志三、錢幣のところによると、金國內では貨幣政策上銀五十兩を錢百貫に固定せしめて居たやうである。金と錢との比價は金國に於けるものは知るを得ないが加藤繁博士の研究によれば宋都杭州に於ては金一兩が紹興四年には三萬文、嘉定二年には四萬文であつたやうである。當時漸趨の傾向に在つたやうであるから、梁肅の宋に使した淳熙元年頃はその中價なる三萬五千文位であつたかも知れぬ。金價は金國に於ても銀價と異り公定價格を定める必要もなかつたらうから、その市價は宋と大差はなかつたらう。斯く考へ得るとすれば梁肅の宋より得た金二百兩、銀二千

兩は錢に換算して一萬一千貫となる。幣帛雜物の量や價格は知る術もないがこれを一千貫とすれば梁肅が宋より得た禮物は合計錢一萬二千貫となる。これに對して六十貫の物力錢を増したとすれば、物力錢は財産見積價格の二十分一が原則であつたこととなる。又劉豫の齊國に於て行はれた商人の資産を課税の標準とする免行錢が五釐即ち二十分一であつたことは既述の如くである。

③⑩ 漢族の金室支持の動機は當初に於ては武力的強制によるに非ずんば社會秩序恢復の希求、愛民的善政の要望、利錄立身の追求等によつて表れる利益感情に基くものであつた。然し時代の降るに従ひ漢族の中にも忠誠的行爲に出づるものゝ多く現れるに至つたのは勿論なるが、これは金室の禮教的愛民政治が徹底したこと、女眞族の漢化と漢族の女眞族に對する理解の深まつたこと等によつて兩者の生活感情の近似化され漢族の金室及び女眞族に對する差別感情の稀薄となつた結果、漢族の金室支持も名分觀念を媒介とし得るに至り、又外賊の侵寇を被るに至つて漢族社會本來の郷勇的義勇的な精神の發揮し得る情勢が出来たからであらう。金室の忠誠に對する昭忠方法も初は主として官爵を贈りその子孫を録用する程度なりしが、貞祐以後衰末の國難に際しては立祠贈諡、樹碑、歲時致祭等によつてこれを加重するに至つた。

③⑪ 既掲金史卷七六、永元傳を見ても大定四年の通檢に際し漢人張弘信の殘酷なるに對しこれを諫止したのは女眞人永元であつた。

③⑫ 北風揚沙錄には

凡將皆不執旗人、視其所向而趨、自主帥至卒、皆自取無從者以粟粥燔肉爲食、上下無異品、國有大事適野環坐、晝灰而議自卑者始、議畢即漫滅之、不聞人聲其密如此、軍將行大會而飲使人獻策、主帥聽而擇焉其合者即爲特將任其事、師還有大會、問有功者與之金、舉以示衆衆以爲復增之、

とあり、

又法令嚴殺人者死仍沒其家人爲奴婢、親戚得則輸牛馬贖之盜一責十以六歸主而四輸官、其他罪無輕重悉皆背、とある。その他金史卷四五刑法志にも女眞固有法の嚴酷なるを傳へて居る。これが太宗時代より漢風法規を加味し始め熙宗海陵を経て漢法化溫和化の度を増して來たのである。

③⑬ 世宗の態度には女眞族の固有精神を恢復保持せしめんと力めると共に漢族の典籍を尙び學問技藝を重する等、元朝とは異り、自己否定的な面もあつて當時の世界文化なる漢族の學藝に自己を解放することを忘れなかつた。これは單に漢族統治の爲めや漢族に對する對面のみからではなく、金國の政治的發展に伴つて女眞族の社會が複雑化した結果、必然的に要請される自らの生活の理性化の爲めにも、理性的文化として漢文化の攝取は必要であつたのである。

③⑭ 金に於ても成文法は熙宗朝の皇統制、海陵時代の正隆續降制書、世宗大定初年の軍前權宜條理、大定十五年の大

定重修制條等幾度か改定補修されて居るが、大定時代までは多くその時の實際事情に照してこれを制定したもので、漢法を主としたものではあつたが律令そのまゝを採らうとしたものではなかつたやうである。然るに章宗泰和元年に成つた所謂泰和律令は唐律令の形式に倣ひ、その内容も多くこれに採つて居たやうである。明昌元年この律令の制定に着手した趣旨に就て見ると、

金史卷四五刑法志には

上問宰臣曰今何不專用律文、平章政事張汝霖曰、前代律與令各有分其有犯令以律決之、今國家制律混淆固當分也、遂置詳定所命審定律令、

とある。從來の法律が多く律令の形式に従つて居ないのを理由としての律令の審定である。以てこの律令制定の精神が窺はれるではなからうか。必ずしも實情に迫られ

た改修ではなく、唐風律令を絶對とし飽くまでその形式に従はんとする態度が知られるであらう。當時金室の漢文化攝取は漢文化的な形式主義に墮して來たことも疑ない。章宗朝に於ては一方に國粹復古政策が唱揚されては居たが、その巧果は形式的で實際には漢文化主義の軌道に登つて北朝としての主體性が、次第に漢的世界性の中に没し行かんとした様が窺へるであらう。政治や吏道が衰頹し、金室が當初避けようとして居た賞告法を政治に用ひるに至つたのもこれと歩調を共にするものと言へよう。

③⑤ 本論稿(中)東洋史研究六ノ五、頁四四、四五參照。

②⑧ 外山軍治氏「金章宗時代に於ける北方經略と宋との交戦」

滿蒙史論叢第三所載參照